

踏査記録

佩植山へ登る

—ただ一人山部川の溪谷を歩いて—

会員 羽 柴 弘

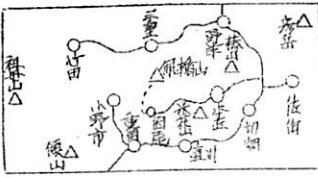
去る五月二十一日、佐伯史談会がねてよりの計画に  
もとずき、本匠村の西北に高く聳ゆる佩植山へ歩いて登  
り登った。

すべての計画に当つた私は、因展の柳井勇氏に車の手  
配をお願ひし、毎晩のように地図を拝してはコースをた  
どり歩しんでいたが、前日になつて急に差支えが出来、  
参加断念という科目になつてしまつた。

然し計画は予定通り行われた。板屋でバスを下りた会  
員は、地元から案内役として高野医師、前記柳井氏へお二  
人共赤会賛助会員からの参加があり、総勢二十名近くにな  
り、柳井氏の御子息外二名の方の御協力による三台の車  
に分乗し、山部川(やまぶがわ)の溪谷をささかの尻り、海抜  
七百五十四米の佩植山の山頂まで登つたため  
である。

何といつても県南の秀峰、山頂からのす  
ばらしい景観、そして途中の山部川の幽谷  
の趣きなど大きくいかにも残念で、ついに  
ムラムラと謀反気(むほんき)を起こし、よ  
し、一人で歩いて登つてやるうというこ  
とに決めた。

翌々二十三日、幸い好天気である。私は



朝のバスで香近川をいり因展へ、  
そして終点虫月に着いたのが九  
時前であつた。それからリュック  
クと肩に引つけかけ、一人でテラ  
テラと歩く。まことに楽しく心  
がはずむ。

道の上下には杉の二十数年生  
と思おれる見事な栗林、少くと  
は何千本、すく／＼とよく伸ん  
でいる。道の上のほとんどの樹位の  
幼令林がつづく。合せるといひ  
難産だと思つてつくづく思う。

小鶴という人家二三軒の村は  
すれ、道の上手に苔むした石塔  
と、五輪塔の水輪を三つほど積  
み重ねてあるのが目につく。石塔の方は一米三十ほどの  
高いのが二基、てつきり庚申塔だと思つて近づいて見  
ると、それは戒名の刻まれた墓石である。五輪塔と合せ

これは迂闊に考えてならぬと思ふ。  
すかその先、今度は右手道下に古い墓地がある。(前図)  
三十基ばかりの古墓の中の、数基は明治時代のもの、お  
とはすべて江戸時代のものとはらんだが、珍らしくも光  
背型と背にした地藏菩薩を刻んだものが八基ばかり。近  
よつてよく見ると戒名が刻まれてある。これまであるこ  
ちで一基か二基あるのは見かけているが、ここのは数が  
多い。地藏信仰の盛んであつた頃のものとあろう。それ  
と先般大越で見かけた自然石を数個伏せ並べた墓、それ  
が十ばかり。これらは林の中にあるので苔がびっしりで  
文字を読もうとしたが、おからないものが多い。あまり時  
間をとつてはいけないので、写真は一応おさめて道路に



小鶴の旧墓地(一部)

出た。

このあたりに私がかねてよりあかされていた番五川の源流である。若葉におおれた山峡の、眼の下はるか深い谷底には、壮大な堰堤が築かれ、満々と紺青の水をたたえ、あふれて何茶も滝をなしている。行くほどに見る左右の谷々にも、重なり合うように大小の砂防堰堤があり、その殆んどは埋まるように若葉の中にかくれている。過ぐる昭和十八年九月の大洪水の惨禍、それを処理した治水復旧の、言わば起死回生の大工事の遺跡といえるまゝである。

特折トラツクが道一ぱいふさいで通りすぎる外、誰にも出会わない。谷向こうの樹林は蕨葉樹が多くて、山のてっぺんまで陽にかがやいて美しい。私はやはりただ一人、ひたすらに歩きつづける。

日にひかる若葉の道の遠くして

山部の中心地松葉から右手に橋を渡り、ゆゝ小さな谷にそうて登る。道は瓜先上りになり、それがうねうねとかなり長くつづく。

老鷹にかじかの和すぬ谷の道

上越越にやつとたどりつく。暇時計は十一時をすぎている。地図をひろげて見ると、このあたりは

海拔四百米の高さ、それだに、あちこちに谷水をひいて水田が開かれています。畦はずりをしてい



佩楯山への道

る中年の農夫に、あいきつをしていられる聞き、十数歩行くと道にそって左手の小さな丘の上は石碑が二基、一つは昭和三年に開通した道路の記念碑、手前のは「徳徳碑」と篆文、よじ登って見て驚いた。次の様に書かれています。

覚

因幡村紐山部百姓

一米五俵

新 木 郎

古昔平日兩親を大切にいたし………にはじまる家業出積、父母孝養の程を苛特に思う、依て御褒美として米五俵を下さるといふ、例の「孝子御褒美」(法伯史談六十九号)として十人表賞された者の一人の孝子である。ここ(上越越)の百姓であつたのである。それは万延元年(一八六〇年)閏三月のこと、毛利藩第十一代高松公の善政の一つである。草深い山部の奥、左たもう堂々と働

くばかりの百世新太郎（当年三十六才）の親孝行が、藩公のお耳に達したのである。そのことを大正十三年一月（当時より六十四年後）、不滅の文字としてそのお墨付の文章とそれまゝ石に刻んでこの丘に建てたという、これも亦奇事なことで、この塚をここを外で見たことがない。写真とはつたが前に植えられている水々枝が邪魔になり充分でない。何とかその全文と写しとりたいものである。上縣越の部落、人家は僅かに三四軒であるが、どの家もすばらしい構え、その大きな彼屋には立派な乗用車がはいっている。

行く程に道路の右手の切取面に、面白い地層が出てくる。地質学にくらい私には、何とも判断出来ないが、直径三十釐前後の丸い石が、一枚一枚何枚もその皮がはげるとようにとれる。皮がつぎつぎにははげている。どこかに貝の化石でもないかと、目を皿にして見たが遂にそれは見つからなかつた。

やがて木立はまばらになり、次第に夏草のしげつた高原がひろがる。右手に佩楯の頂きがま近にせまり、教基のテレビ塔が、五月の青空に高く銀色に光っている。はいささかの疲れを覚えながらも、更に登りつづける。うぐいすの谷をたぐりつづくと草野かな

十一時四十五分、私はさおノと薫風のそよぐ佩楯の山頂に立った。虫月からつきり三時間である。

展望がすばらしい。今来た本匠村側から見ると裏側に当る北の方には、旅の下に三重所から三重、原にかけてのさとりノの屋根が美しい田園風景、霞んだる分向うには久住連山が黒々とそびえている。東から南にかけては雄岳、がらし嶽、秀岳、天間山。椿山が見え、秀岳が僅かにその山頂をのぞかせ、その次に氷花山の大きな山

塊、殆んど真南に酒利岳（これは佩楯より米だけ低い）、その他群山波濤のように重畳とつらなり、そのつづきが傾山となり祖母山に連なる。山を左山でこの三方の人家集落は殆んど見えぬ。残念ながら足許の本匠村をばじめ、南即庄伯市の所々村は、山を左山に底にたくれて見えぬ。佩楯の頂上は、東北から西南にかけて長く凡そ千米、中は百米もない。多少の起伏をもつてはいるがほぼ平らになつてはいるこの山頂には、今はNHKもOBSのテレビ中継塔が四基立ち並んでいる。いざれも平素は無人、今日は登山者もなく、広い頂上に私か一人であつた。

豊後瓦土記の大野都の條に「烽火所」とある、その烽火台があつたのがこの佩楯であるという。私は烽火台の關係で灰立てに字を当てたものも考えていたが、辞典で見たら馬上戦の際身につけた鎧の一種で、腹と膝を守る細長い鎧の若たさうで、形から佩楯山と名づけたいかとわかつた。

とちかく七百五十四米のこの山頂まで、車で完全に登れるのである。直川村から入った峯越林道が石峠山に登り、上縣越からこの佩楯の肩を越し、はるか西の方に伸び、樞峯、三國峠の方向と愛しき山頂で、アルトドールがうなり、ダンブカーが動いている。これの完成も間近いか、そうなる日豊海岸公園に対抗して、ここ佩楯山を中心とし左山のドライブが観光面で大きくとり上げられるに相違ない。

疲れもおさまらないし、上縣越に下りてお茶でももらつて昼食にしようと考えて、私はリュックをとり上げてゆつくりゆつくりと下山にかかつた。そして上縣越で戻庚申塔をみるべ、更に下つたとこの谷間で傘当をつかいて、尚時河もあつたので山新川を二将ほどさかみはつたりして、そして虫月からバスで帰つたのであつた。